

十二世紀グロスタア市の土地譲渡証書

鵜川馨

I

イングランド中世の都市文書 (Civic Records, Municipal Records) は、(1)都市特権附与のための文書、勅許状 (Royal Charters)、開封勅許状 (Letters Patent)、(2)都市法、布告等を記録する慣例集成 (Customals)、(3)都市行政に関する記録・文書 (Administrative Records)、(4)裁判権に関する記録・文書 (Judicial Records)、(5)ギルドに関する記録・文書、(6)雑纂 (Miscellany) とに大別される⁽¹⁾。都市文書は12世紀末にすでに散見せられ、13世紀に入ると、残存して現在にまで伝えられた数量は少いとはいえ、基本的な文書——勅許状、慣例集成、会計記録 (Account Rolls)、裁判文書 (Court Rolls)、登記簿 (Registers, Enrollment of Deeds)、ギルド文書 (Gild Rolls)——は、ほぼ整えられたようである⁽²⁾。過去数年間筆者が研究対象としたグロスタア市についてみれば、13世紀の都市文書は、都市特権を附与する勅許状を除けば、殆んど伝えられていない⁽³⁾。とはいえ、グロスタア市の不動産に関する数多くの捺印証書 (deeds) が伝えられている。現在グロスタア市には、二つの捺印証書の蒐集があって、ひとつはグロスタア市庁舎 (Guild Hall) に保管されている捺印証書類であり、他のひとつはグロスタア主教座聖堂図書室 (Cathedral Library) に保管されている捺印証書類である。前者は全体で1190通を数え、12世紀から1650

十二世紀グロスタア市の土地譲渡証書

年までに作製せられた捺印証書であり、そのうち約半数は1300年以前に作製せられたものと推定される。これらの捺印証書は主として聖バルトロマイ養育院 (The Hospital of St. Bartholomew), 聖マーガレット養育院 (The Hospital of St. Margaret), 聖墳墓養育院 (The Hospital of St. Sepulchre) の所有にかかる不動産に関するもので、祈願所 (Chantry) の解散にともなってこれらの養育院が市当局に移管せられた時、捺印証書も同時に移管せられたものと伝えられている。⁽⁵⁾ 後者は全体で394通を数え、1175年から1553年までに作製せられた捺印証書類であり、本来グロスタア市内のベネディクト派聖ペテロ修道院 (St. Peter's Abbey) のものであったが、修道院解散にともなって、グロスタア主教座聖堂参事会会長および参事会 (The Dean and Chapter of Gloucester) に移管せられたものである。これらの捺印証書は、19世紀中葉大版の紙に額縁に表装されて10冊の冊子に合本せられている。⁽⁶⁾ 本稿は、後者のうち特に12世紀中に作製せられたと推定され、グロスタア市内の不動産に関する捺印証書 (deeds)——土地権利証書 (title-deeds)——に限って考察するものとする。いずれ稿を改めて、他の捺印証書についても検討を加えることにしたい。

(1) L. J. Redstone & F. W. Steer, *Local Records, Their Nature and Care*, London: G. Bell & Sons, Ltd., 1953, pp. 142—161.

(2) G. H. Martin, *The English Borough in the Thirteenth Century*, in: *Transactions of the Royal Historical Society*, Fifth Series, Vol. 13, pp. 123—144.

(3) 鵜川 馨, 「中世都市グロスター」, イギリス中世史研究会編, 『イギリス封建社会の研究』, 東京, 山川出版社, 1970年, pp. 223—250. 同, 「ラントオニイ修道院の地代帳」, 『立教経済学研究』第25巻第3号, 1971年, pp. 1—25 (290/314).

(4) *Calendar of the Records of the Corporation of Gloucester*, compiled by W. H. Stevenson, Gloucester: John Bellows, 1893, pp. v—xx.

(5) *Ibid.*, pp. v—xiii, 70—454.

(6) *A Catalogue of the Records of the Dean and Chapter including the*

former St. Peter's Abbey, compiled by Isabel M. Kirby, Gloucester :
The Gloucestershire County Council, 1967, pp. 2—22.

II

12世紀中に作製せられたと推定されるグロスタア聖ペテロ修道院関係の土地権利証書 (title-deeds) の個別的検討に先立って、アングロ・サクソン時代以来の土地権利証書の成立とその展開過程について概観し、その問題点を予め指摘しておこう。⁽¹⁾このような予備的作業を何故必要とするかといえ、古文書学者 (palaeographer, diplomatist)、法学者 (lawyer)、法制史家 (legal historian) は、ある共通の認識を持ちながらも、それぞれ独自の用語法を用い、時にそれぞれの用語をさらに広狭両義に用いるために、かなりの混乱がみられるからである。またこの時代の証書形式は勿論のこと、証書形式が示す土地譲渡 (conveyance) それ自体に関する法理論も、未だ流動的であり、必ずしも固定したものでないために、一層問題の把握を困難にしていることも否めないからである。

アングロ・サクソン諸王のキリスト教への改宗を機として、諸王の教会への土地寄進、特権附与が行なわれ、やがてカンタベリイの大司教タルソスのテオドロス (Theodore of Tarsus, 668—690) によって土地寄進を記録する文書の作製が行なわれることとなったと推定される。⁽²⁾7世紀末にその起源を有するアングロ・サクソンの寄進状 (donation charters) は、ローマの私的証書 (Roman private deeds) を雛形とし、大きい羊皮紙に、いかめしい書体のラテン語で認められ、加えて宗教 (キリスト教) 的色彩を帯びるものとなったので、荘厳(な)文書 (solemn documents, solemn diplomata) と呼ばれている。⁽³⁾古文書学者はローマ教皇の尚書局 (papal chancery) の発給する文書を特権状 (*privilegium*) と呼ぶのに対して、世

俗の権力者の尚書局 (lay chancery) の発給する文書を公許状 (*diploma*) と呼ぶ。⁽⁴⁾ アングロ・サクソン諸王の公許状の書式上の特徴は、祈願文 (invocation) に始まり、宗教的序言 (proem) が続き、本文 (text) において土地寄進 (誰が、如何なる土地を、誰に寄進したか) について記し、後にはより詳細にかつアングロ・サクソン語で書かれるようになった寄進地の境界線が認められ、聖別文 (sanction) と違背に対する呪詛文 (anathema) が続き、最後に寄進の儀礼に立合った証人の十字架の印を附した署名 (attestation) をもって終るというものであった。⁽⁵⁾ そもそもゲルマン法は口頭主義 (oralism) であって、寄進状の作製は権利変動原因たる事実 (dispositive fact) ではなく、証拠事実 (evidentiary fact) にすぎなかった。即ち寄進自体は小刀によって切り取られた土塊を祭壇に捧げるという土地占有の引渡し (livery of seisin) を象徴する儀礼によって法的に成立すると考えられ、寄進状は王の寄進行為に同意を与え、この儀礼に立合った賢人達 (witans) が、寄進という法的事実を証明するもの (*notitia*) であつたにすぎない。⁽⁶⁾ しかし時の経過とともに、寄進状 (証明書) 自体が、不動産権利証書 (title-deeds, land-bocs) と看做されるようになり、教会のみならず俗人に対する土地譲渡にも利用されるようになった。⁽⁷⁾ この具体的過程とそれにもとづく書式の変化とについて立入って詳細に論ずることは本稿においては割愛せざるをえない。

アングロ・サクソン諸王の公許状と大陸、とりわけカロリング朝のそれとは本来同一の性格の文書ではあるが、顕著な差異が認められる。即ち(1)大陸の文書には、文書の表面に封蠟を用いて大きい印章が押捺されているのに対し、アングロ・サクソン諸王の文書は捺印が施されていない。(2)大陸の文書の書体は行書体 (cursive hand) であるのに対し、アングロ・サクソン諸王のそれは、修道院で用いられる楷書体 (book-hand) である。(3)大陸の文書はアングロ・サクソン諸王のそれのように多数の立合人

の署名を欠く代りに、文書を発給する部局の長官、尚書 (chancellor) あるいは伝旨官 (referendary) による認証 (subscription) がある。⁽⁶⁾ おそらくアングロ・サクソン諸王のそれは、大勢の賢人の承認の下に発給される以上、尚書の認証を必要としなかったのであろう。しかし、残された文書に即してみれば、大陸の文書の方が古文書学的により整備されたもので、その信憑性が担保されているのに対し、アングロ・サクソン諸王のそれは、筆跡と書式のみが文書の信憑性を保証するにすぎず、従って偽文書も多く見受けられ、とくに原本が失なわれ、写本のみが伝えられる場合に、⁽⁹⁾ 史料批判は特に慎重でなければならない。

10世紀の後半、とくにエセルレッド (Ethelred) 王の時代から、公許状と全く異なった新しい形式、形態を備えた文書が、国王によって発給せられるようになった。これは従来の公許状が、特許状 (E charter, L *carta* OE *boc*) と呼ばれたのに対して、令状 (E writ, L *breve*, OE *gewrit*) と呼ばれ、州会 (shiremote) に宛てられた書簡であった。即ち勅許状 (royal charter) の交附によって (*per cartam*) 証明された土地譲渡乃至特権附与を、その土地、特権と関わりのある州会に対し、王の書簡 (*brevis regis*) をもって通告したものであった。令状とはそもそも司法上の文書ではなく、国王の行政上の文書であった。古文書学的に言えば、従来の捺印のない、冗長でしかも虚仮威しのラテン文で綴られた公許状に対し、令状は(1) 印章によって認証せられている、(2) 短文で簡潔にして正確な書式である、(3) 公用文のラテン語でなく日常語即ちアングロ・サクソン語で認められている等の諸点で、数段優れたものであるとされている。後述する如く現にこの令状は、公許状に取ってかわり、「ノルマン征服」以降——用語は再びラテン語となるが——の公用文書即ち令状系の勅許状 (writ-charter)、開封勅許状 (letters patent)、封緘勅許状 (letters close) の原型となり、また令状自体次第に分化をとげ、行政上の令状 (executive writ) と司

法上の令状 (legal writ) とが展開して、国政全般にわたって重要な役割を果たす文書となった。さらに英国のみならず、令状形式の文書は大陸諸国においても採用されるにいたっている⁽¹⁰⁾。

令状は、その書式から一切の宗教的色彩が払拭され、祈願文、宗教的序言を欠き、名宛人 (addressee) に対する頭書 (superscription) [= 令状の発給者] の挨拶文 (salutation) をもって始まる。令状の発給者の国王は、一般的、抽象的に挨拶を送るのではなく、地域を指定し、州会の役職者 (officier) である司教 (E bishop, OE biscop) 伯 (E earl, OE ealdorman, eorl), 時により州奉行 (E sheriff, OE scirman, scirgerefa) の名を挙げて、かつ時には州会への出廷者 (suitors) である州の従士 (E thane of the Shire, OE þegen) に、換言すれば、神に対してではなく、特定の人間に対して挨拶を送っている。次に公告文 (notification) において、国王が特定の人物、教会に対し、特定の土地 (領地) の譲渡 (grant) をなしたことを、現在完了形を用いて記し、さらに注釈文 (exposition) において、土地譲与に関連して裁判権 (E sake and soke, OE sacu and socu), 財政収入権 (E toll and team, OE toll and team) 等の委譲についても言及する場合がある。令状には発給の日付 (date), 認証 (subscription) を欠くのが慣例である⁽¹¹⁾。

前述のように大陸の公許状には、捺印が行なわれたが、その方法には二通りあった⁽¹²⁾。第一の方法は、フランスの古文書学者によって *en placard* と呼ばれ、文書の表面に封蠟を垂らし、印壘を押捺する。第二の方法は、教皇、神聖ローマ皇帝の発する大勅書 (*bullā*) にみられるように、文書の下端を折り上げ、そこに羊皮紙の細片あるいは麻又は絹の紐を附し、そこに鉛製の円形の鋏をつけ、印壘を押捺する。これを垂飾り印 (coin-seal, *bullā*) と呼ぶ。アングロ・サクソンの令状は、通常幅30糎、長さ5糎ほどの横長の羊皮紙に認められたので、表面に捺印する余白部分はなかった

し、大勅書のように、下端を折り上げて、垂飾り印を附す手間のかかる方法もとられなかった。従って全く新しい簡便な捺印方法が工夫されることとなった(図参照)。令状の左下隅の3~5糎を残し、右側から下端に平行に二本の切れ目を入れ、細い二本の紐状とする、その右端のやや幅の広い一本(seal tag)に円形の封蠟をもって両面からはさみこみ、その両面にそれぞれ異なった国王の座像を彫んだ印璽(エドワード懺悔王のそれ)をもって押捺する(double faced seal)。さらにより細いもう一本(wrapping tag)で、蠟印(wax-seal)を包みこむように折りたたんで令状をくくりつける。この新しい捺印法をフランスの古文書学者は *sur simple queue* と呼ぶ(図1参照)。この捺印法は、さらに工夫が加えられ、「ノルマン征服」後の令状系勅許状をはじめとして捺印証書の捺印方法に取り入れられる(図2参照)。その方法は勅許状、割印証書の下端を約1~2糎折り返し、折り返し部分と下の本紙との中央の部分に二条の切れ目を入れ、約1~2糎の細長い羊皮紙片を二つに折り、図3のように切れ目を通して、証書の下端から引き出し、二枚の紙片をねじり、最末端を左右に開く。そしてねじった部分に封蠟を印章の形に合わせて、円形、ややとがった楕円形につけ、

図1 令状の捺印法

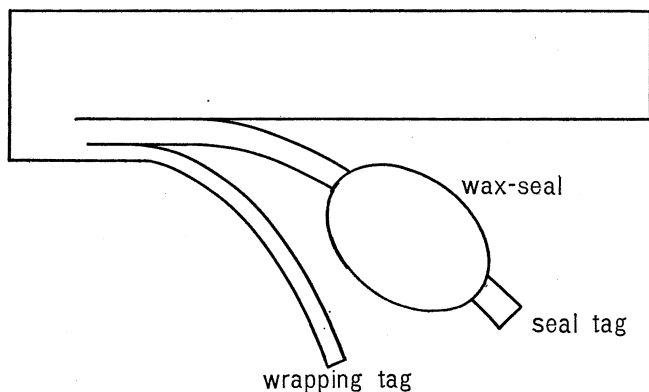


図2 令状系勅許状の捺印法

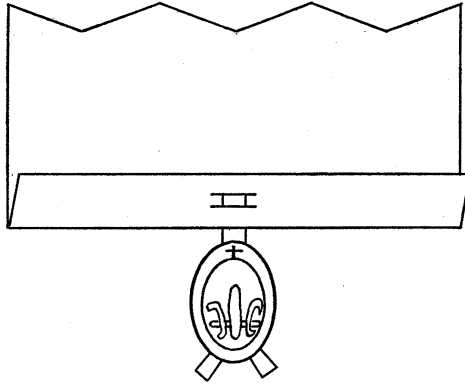
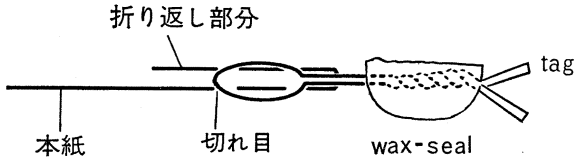


図3



その表面に印章を押捺する。印章は中央に百合、獅子、鳥、魚、人等の図案が刻まれ、その周辺に何某の印というラテン文字が刻まれている。通例は封蠟の表面に押捺するだけであるが、修道院長の押捺の場合、裏にもうひとつ別の印章を押捺し、副署と同じ効果を持たせる場合もある。

上述の二種類の文書、即ち公許状と令状は、国王の尚書局の発給するところから、公文書 (official documents, public records) あるいは広義の勅許状 (royal charters) と総称される。これに対して私人の発給する文書は、私文書 (private deeds) あるいは私許状 (private charters) と総称されよう。アングロ・サクソンの私許状は、おそらく8世紀前半、ウースタアの司教の発給した土地賃貸認可状 (lease) を嚆矢とし、8世紀後

半に入ってはじめて俗人による寄進状の発給の例がみられるといわれている。⁽¹³⁾ いずれにせよ、これらの私許状は、国王の発給する公許状に準じた書式を有し、宗教的序言や呪詛文をとまない、また証人の筆頭には必ずといってよいように国王の署名を見出すのである。また新たに文書を作製しないで、国王の発給した公許状にアングロ・サクソン語で裏書きを加えることによって寄進を行なう場合もあつた。⁽¹⁴⁾ このように私許状が、公許状に準拠しているのに対し、私文書の中核をなす文書は、9世紀以降作製せられた遺言状 (E will, OE cwide) と総称される文書であつた。

ここで遺言状と総称される文書は、現代の法律上の遺言書 (last will and testament) の原形乃至源流といえるとしても、必ずしも現在の遺言書と同一の性格の文書とはいえない。即ち現在の遺言書は、文書に拠る遺言人の死後効力を発する片務的財産処分それ自体であり、遺言の取消し乃至未確定という性格を有し、加えて遺言執行人の指名を必要とするのに対して、アングロ・サクソンの遺言状は、取消し、変更不能の双務契約的死後贈与 (*Donationes irrevocabiles post mortem*) に関する文書的証拠にすぎず、遺言執行人の指定もない。ここでアングロ・サクソン時代の遺言について詳細な考察を展開する紙幅も与えられていないので、その古文書学的特徴を明らかにする限りにおいて問題点を指摘するにとどめよう。⁽¹⁵⁾

そもそも、現在の遺言制度は、ローマ法の影響のもとに、とりわけ遺言に関する法が世俗の法廷ではなく、教会の法廷の管轄下に集中されて以降、即ち13世紀以降次第に整備され、確立されることとなる。⁽¹⁶⁾

しかし、キリスト教改宗以前のアングロ・サクソン古代に動産の遺贈 (bequest) の慣行がなかったわけではない。即ち死後の動産の三分の一は寡婦のために、次の三分の一は子供達のために、そして最後の三分の一は死者自身のものとされ、死後の世界のために備えて、遺体にそえて埋葬されるか、焼かれる慣行があつた。⁽¹⁷⁾ キリスト教への改宗後、その死者の分を

貧民（教会）に寄進する慣行が、ノーサンブリアにおいて行なわれたとペーグはその教会史に記録している⁽¹⁸⁾。やがて不動産の遺贈（dimise）が教会によって奨められるようになる。その土地の処分に関する遺言状は、landboc のそれと同じく国王の認可（*approbation*）を必要とした⁽¹⁹⁾。しかし遺言（厳密にいえば動産に関する遺言を *testament* といい、不動産に関する遺言を *last will* という）は、ローマ法の場合のように文書による必要はなく、ゲルマン法に特徴的に、口頭で行なわれること（*oralism*）が合法とされ、遺言状というアングロ・サクソン語 *cwide* も本来「発言」という意味であり、「遺言する」という表現（*cwaeth his cwide*）も「発言を述べる」ということに端的にあらわされている。またこのことは、アングロ・サクソン諸王の公許状が華麗なラテン文をもって綴られ、整った書式、体裁——従って書式からその作製年代、由来、信憑性が容易に検証される——を持つものに対して、アングロ・サクソンの遺言状は、口語体のアングロ・サクソン語をもって綴られ、定められた一定の書式を有さなかったことと照応している。公許状が公式の文書であるのに対し、遺言状は私的で、法技術的でない単なる覚書にすぎなかった。遺言状に述べられている内容は、死後贈与（*gift post mortem*）、死因贈与（*donatio mortis causa*）、臨終遺言（*novissima verba*）、生存者間贈与（*gift inter vivos*）を含む多種多様なものであり、さらにその形式についてみると、二通乃至三通の同文の遺言状を作製する慣行がみられた。即ち一枚の羊皮紙に、同文の遺言状を三通認め、それぞれの文面の中間の余白に *CHYROGRAPHVM* という文言を認め、その文言を切りさくように缺を入れて、三通の遺言状に切り離す。そしてその一通を遺言者（*testator*）= 贈与者（*donor*）が所持し、もう一通は主要な受贈者（*donee*）（たとえば修道院）が所持し、最後の一通は、利害関係のない修道院乃至国王に預託されたという。このような形式を取ることは、第一には遺言によって財産処分行為が口頭で行

なわれ、遺言状は単なる覚書にすぎないこと、第二に、生きている証人によって証明せられるだけでなく、割印証書 (chirograph) によって証明せられていること、第三に、口頭の遺言は贈与者と受贈者の間の契約上の取決めであったことを示している。⁽²¹⁾ さらに贈与者と受贈者の関係は双務的であることが強調されよう。即ち受贈者は、受約者 (promisee) であると同時に、受諾者 (promisor) でもある。遺言者 = 贈与者は、その死後土地の贈与を約束するのに対して、受贈者 (教会もしくは修道院) は、贈与者の遺体の教会乃至修道院内の埋葬、あるいは遺言者の先祖、親族の靈魂のために宗教上の奉仕を約するのである。従って契約の当事者として、それぞれ遺言状を所持することになる。遺言状の作製に先立って証人の面前で贈与者 = 約諾者が受贈者 = 受約者に、象徴的な動産質 (E pledge, OE wedd) を引き渡すという儀礼を通じてこの契約が成立し、贈与者の死亡をもって贈与の対象なる不動産の占有が受贈者に現実に引き渡され、動産質が受け戻され、契約自体が履行されたこととなる。この点で、不動産譲渡に際し、不動産権利証書 (landboc) の引き渡しは不動産の引き渡しを象徴する儀礼にあたるのに対して、遺言状の引き渡しは、贈与者の約束を証する単なる証明書 (notitia) の引き渡し (非儀礼) に過ぎないことを意味している。遺言状の場合、そこに契約と土地譲渡の二重性が認められる。⁽²²⁾

さてエドワード懺悔王の即位(1042年)から、「ノルマン征服」をはさみ、ヘンリー二世の死 (1189年) にいたる期間に作製せられた公文書を、古文書学者はアングロ・ノルマン期の公文書 (Anglo-Norman Charters and Writs) とし、アングロ・サクソン諸王の公文書 (Anglo-Saxon Charters) と13世紀以降の後期の公文書 (Later Charters and Diplomatic Instrument) との中間的、過渡的形態として把握している。⁽²³⁾

土地譲渡についてみれば、「ノルマン征服」を転機として、古来のゲルマン法の原理、即ち口頭主義 (oralism)、儀礼主義 (formalism)、象徴主義 (symbolism) への回帰が認められ、全体として文書作製が行なわれなくなる傾向にあった。⁽²⁴⁾

公文書についてみれば、懺悔王の時代になお数多く発給せられた公許状 (solemn diplomata) は「征服」を機にその姿を消したが、アングロ・サクソン諸王の令状形式はノルマン諸王によって継承され、展開されることとなった。「征服」直後暫くはアングロ・サクソン語の令状の発給がみられるが、やがてラテン語に代替せられていく。ヘンリー一世の時代に令状にも日付が加えられ、書式も次第に精緻化され、1名から2名、後には多数の証人が加えられ、令状系の勅許状 (writ-charter) と呼ばれる混淆型の (過渡的な) 文書形式が成立する。13世紀以降、はじめて後期の本格的勅許状 (later charter) として、書式、形態ともに完成し、固定化する。⁽²⁵⁾

他方、より簡潔な原型を保った令状は、国王の行政的手段として存続せしめられ、行使せられていった。⁽²⁶⁾

私許状 (private charter) も、国王の尚書局の発給する新しい令状系の勅許状の形式を模倣することとなったが、その書式はなお多様であり、正確さを欠くものが多く、しかも13世紀以前の段階では発給の日付を欠き、証人も立合人であったかどうか疑問の余地が残されていた。12世紀の私許状は屢々欠陥があり、曖昧さを伴うものではあるが、13世紀以降のように書式が完備し、紋切型となった私許状と比較すると、思いがけない用語例や方式に遭遇し、史料的价值はかえって高いといえよう。⁽²⁷⁾

私文書についてみれば、「ノルマン征服」以後アングロ・サクソンの遺言状も、急速にその姿を消した。このことは「征服」を機に土地遺贈 (dimise of land) の制度が廃止せられたことによる。尤もアングロ・サクソン時代においても、土地の遺贈は例外的特権と看做されていたし、「征服」後軍

事的な見地から、土地の遺贈が禁ぜられ、土地の死後贈与は、都市を除いて法的に認められなくなった。⁽²⁸⁾そして13世紀以降、新しい土地譲渡の勅許状の発給の復活と時を同じうして、遺言執行人を伴う新しい形式の遺言書（動産の遺贈に関して）が、教会の法廷とローマ法とを媒介として形成されることとなった。⁽²⁹⁾

私文書としての遺言状は、その姿を消すこととなるが、その書式即ち割印証書方式は、「征服」後の私文書に継承せられていったのである。

最後に、私文書のうち土地譲渡（conveyance）に関する証書に限って、その展開過程を概観しておこう。自由土地保有による土地に関する譲渡は、当事者間の法的行為によって行なわれる方式と法廷における訴訟を通じて行なわれる方式とがあり、それぞれについて異なった書式が発展している。⁽³⁰⁾

最も基本的な土地譲渡方式は、公示譲渡（feoffment）であり、占有の引き渡し（livery of seisin, *traditio*）の儀礼によってのみ法的効果を有するものであった。即ち譲渡される土地内において、土地を象徴する一本の枝、一塊の土、それを切り取った小刀の引き渡しにかわって、12世紀に入ると州あるいは郡の法廷における証書の朗読と証書の引き渡しとが通例となり、アングロ・サクソン諸王の公許状、アングロ・ノルマン諸王の令状系勅許状を祖型として、公示譲渡の証書の書式が成立する。⁽³¹⁾この証書には二形式あって、そのひとつを平型捺印証書（*deed poll*）といい、他のひとつを割印証書（*chirograph*）あるいは齒型捺印証書（*deed-indented, indenture*）という。前者は単一証書（*carta simplex, single charter*）と呼ばれるように当事者がひとりの場合であり、後者は正副証書（*carta duplicata, carta cyrographata, duplicate charter*）と呼ばれるようにふたり以上の場合に用いられ、また前者は直接公示譲渡（*direct feoffment*）に際し用いられ、後者は権利放棄（*release*）、権利返還（*surrender*）のように協定

(convention) の性格を有する間接公示譲渡 (indirect feoffment) に際し用いられたという⁽³²⁾。平型捺印証書は当事者がひとりの場合、文書形式に何の工夫も必要でなく、長方形の用紙をそのまま用いたが、割印証書は当事者が数名いる場合、証書の偽造をおそれて、一枚の羊皮紙の上に必要な数の同文の証書を認め、それぞれの間に CHIROGRAPHVM という文言を記し、その文言を切断するように切り離し、それぞれが一通ずつ所持した。前述の如くこの割印証書は、アングロ・サクソンの遺言状にすでに認められる書式であったが、この時期には直線に切り離されるのではなく、さらに偽造防止の工夫をこらし、ぎざぎざの線型に缺を入れたので、歯型捺印証書という形式が整うこととなった。歯型捺印証書は14世紀に入ると「甲乙兩人の間に作製せられし本証書は…」というきまり文句に始まる独自の書式を持つにいたったが、13世紀までの段階では平型捺印証書とそれほど異なった書式を持つにはいたらなかったし、そのいずれも、令状乃至令状系勅許状、私許状の書式を踏襲していたといえる⁽³³⁾。

その書式は(1)証書の説明部 (recital) に始まり、譲与者 (grantor)、被譲与者 (grantee) の氏名、物件が記入され、(2)物権表示条項 (habendum)、保有条件条項 (tenendum) が続き、(3)保留条項 (reddendum) において、地代等を明示する。初期にあっては、譲渡・移転 (alienation)・質入れ禁止の誓約、物件の管理、改良に対する保証、火災による損害の補填、州法廷への出廷義務等がみられる。(4)瑕疵担保条項 (warrantry) が続き、最後に捺印条項 (sealing clause) と証人条項 (witness clause) がある。捺印は契約当事者のみで行なわれ、その他の証人は書記によって氏名が記載されるにとどまる。14世紀以降は、捺印条項、証人条項にかわって、証書作製の日付と場所が記入せられるようになるが、それ以前の証書には記載を欠く⁽³⁴⁾。

このような公示譲渡の書式は、15世紀にいたって始めて完成するのであ

って、時代を遡るにつれて未完成の形で存在している。またこの基本の書式は、例えば権利放棄 (release) [被贈与者がすでに占有を有している場合に贈与者がその権利を放棄する場合、即ち賃貸人 (lessor) が賃借人 (lessee) に土地を譲渡する場合、不動産占有被侵奪者 (disseisee) が不動産占有侵奪者 (disseisor) にその権利を与える場合] と権利返還 (surrender) [release と逆の場合で、例えば生涯権者 (tenant for life) または期間権者 (tenant for years) が復帰権者 (reversioner) に権利を戻す場合], 追認 (confirmation), 交換 (exchange), 共有物分割 (partition) のような譲渡の場合にも適用される。これらの場合には公示譲渡の場合と異なっていて、現実の占有の引き渡しがなくともよく、証書の作製によってのみ効力を有する。⁽³⁵⁾

不動産の公示譲渡は、国王の法廷、州・郡の法廷で行なわれ、国王を始め有力者、役人が証人となっていた。12世紀以降証書の偽造を防ぐために私証書の登記が行なわれるようになり、手数料を支払って、王室財政記録 (Pipe Rolls, 1155—) や、後には封緘勅許状記録集 (Close Rolls, 1204—1903) の裏面に登記されるようになった。また地方の法廷、特に都市の法廷においても古くから不動産関係の証書類の登記が行なわれている。⁽³⁶⁾

より積極的に法廷を利用する方式に、和解譲渡 (fine) がある。この方式は1195年に遡るといわれるが、法廷において訴訟をおこし、和解 (fine, or final concord) に達し、その和解が法廷において承認され、記録される。一枚の羊皮紙に三通の和解文が認められ、両当事者に一通ずつ手交され、残りの一通は和解譲渡判決原本 (foot of fine, *pes*, *pedes*) と呼ばれ、国王の記録所に保管される。この和解は1年と1日経過すれば確定し、覆えすことができないので、最も確実な土地所有権確定の方式であったところから、擬制的訴訟手続きが多くみられたのである。これと類似のものに財産回復 (recovery) と呼ばれる訴訟手続もあつた。⁽³⁷⁾

- (1) 古文書学者による研究には、Hubert Hall, *Studies in English Official Historical Documents*, Cambridge: at the University Press, 1908. Do., *Formula Book of English Official Historical Documents. Pt. I Diplomatic Documents*, Cambridge: at the University Press, 1908. V. H. Galbraith, *An Introduction to the Use of the Public Records*, London: Oxford University Press, 1934. 等がある。前二者は極めて体系的であり、古典的研究といえるが公文書の観点からみているので、私文書については、やや簡略にすぎる嫌いが無いわけではない。法制史家のものは、Sir Frederick Pollock & Frederic William Maitland, *The History of English Law before the time of Edward I*, Vol. II, Chapter IV, Cambridge: at the University Press, 1895 (1898: 2nd Edition), pp. 80—106. Sir William Holdsworth, *A History of English Law*, Vol. II, London: Methuen & Co. Ltd. and Sweet & Maxwell Ltd., 1903 (1936: Fourth Edition), pp. 77—78. Do. *A History of English Law*, Vol. III, London: Methuen & Co. Ltd. and Sweet & Maxwell Ltd., 1908 (1942: Fifth Edition), pp. 217—256, 666—673. Theodore F. T. Plucknett, *A Concise History of the Common Law*, Book Two, Part III, London: Butterworth & Co. Ltd., 1929 (1956: 5th Edition), pp. 610—623. の conveyances の項が取敢えず指摘されよう。1930年代に「ケンブリッジ英法史研究」(Cambridge Studies in English Legal History)の一部として刊行された Dorothy Whitelock, *Anglo-Saxon Wills*, Cambridge: at the University Press, 1930. A. J. Robertson, *Anglo-Saxon Charters*, Cambridge: at the University Press, 1939. の編集者ヘイゼルタイン教授(H. D. Hazeltine)のそれぞれの序文も重要である。さらに F. E. Harmer, *Anglo-Saxon Writs*, Manchester: Manchester University Press, 1952. F. M. Stenton, *The Latin Charters of Anglo-Saxon Period*, Oxford: at the Clarendon Press, 1955. の刊行を受けて、*English Historical Documents* の第1巻、第2巻の解説が、ほぼ現在の定説となっている。Dorothy Whitelock, *English Historical Documents, c 500—1042*, London: Eyre & Spottiswoode, 1955, pp. 337—349. David C. Douglas and George W. Greenaway, *English Historical Documents, 1042—1189*, London: Eyre & Spottiswoode, 1953, pp. 799—802.
- (2) F. M. Stenton, *op. cit.*, pp. 31—32. *E. H. D.*, Vol. I, pp. 342—3.
- (3) *E. H. D.*, Vol. I, pp. 342—3.
- (4) V. H. Galbraith, *op. cit.*, pp. 15—18.
- (5) H. Hall, *Studies*, pp. 191—2.

- (6) Sir F. Pollock & F. W. Maitland, *op. cit.*, Vol. II, pp. 83—87. *H.D.*, Vol. II, p. 801.
- (7) H. Hall, *op. cit.*, pp. 187—8.
- (8) V.H. Galbraith, *op. cit.*, pp. 17—18.
- (9) H. Hall, *op. cit.*, pp. 172.
- (10) H. Hall, *op. cit.*, pp. 204—6. V.H. Galbraith, *op. cit.*, p. 18 ff. A.J. Robertson, *op. cit.*, pp. xiv, xv. F.E. Harmer, *op. cit.*, pp. 1—3, 34—38. F. M. Stenton, *op. cit.*, pp. 89—91. *E.H.D.*, Vol. I, pp. 345—6; Vol. II, p. 800. 松垣裕, 『イギリス封建国家の確立』東京: 山川出版社, 1972年, 第三章, 111—143頁。
- (11) H. Hall, *op. cit.*, pp. 201—4. F.E. Harmer, *op. cit.*, pp. 24—28, 34—38, 61—82.
- (12) H. Hall, *op. cit.*, pp. 173, 217—8. F. E. Harmer, *op. cit.*, pp. 92—93. 現在まで蠟印が伝えられている例は多くない。しかし蠟印が切り取られてもその残部 (step) の存在の有無が文書の真贋のきめ手となる。
- (13) *E.H.D.*, Vol. I, pp. 346—7.
- (14) *ibid.*
- (15) Sir F. Pollock & F.W. Maitland, *op. cit.*, Vol. II, pp. 314—356. Sir W. Holdsworth, *op. cit.*, Vol. II, pp. 90—97. H.D. Hazeltine, General Preface (Comments on the Writings known as Anglo-Saxon Wills) in: D. Whitelock, *Anglo-Saxon Wills*, pp. vii—xl. T.F.T. Plucknett, *op. cit.*, pp. 732—746.
- (16) H.D. Hazeltine, *op. cit.*, pp. xxxix. 土地の遺贈に関して書状でなすべきことと定めたのは1540年の The Statute of Wills (32 Henry VIII, c. 1.) である。
- (17) T. F. T. Plucknett, *op. cit.*, p. 735. Sir F. Pollock & F. W. Maitland, *op. cit.*, Vol. II, p. 314. Sir W. Holdsworth, *op. cit.*, Vol. II, p. 94.
- (18) *Venerabilis Bedae, Historia Ecclesiastica gentis Anglorum. Ad fidem Manuscriptorum recensuit Josephus Stevenson. Londini: Sumptibus Societatis, M.DCCC. XXXVIII*, pp. 359 (lib. v. cap. 12). ベーダ, 長友栄三郎訳, 『イギリス教会史』東京: 創文社, 1965年, 390頁。
- (19) T.F.T. Plucknett, *op. cit.*, p. 335.
- (20) Sir F. Pollock & F. W. Maitland, *op. cit.*, Vol. II, pp. 319—320. T.F.T. Plucknett, *op. cit.*, p. 733.
- (21) H. D. Hazeltine, *op. cit.*, pp. xxiii—xxv. Sir F. Pollock & F. W.

- Maitland, *op. cit.*, Vol. II, p. 321.
- (22) H.D. Hazeltine, *op. cit.*, pp. xxvii-xxxviii.
- (23) H. Hall, *Studies*, pp. 208-226.
- (24) T.F.T. Plucknett, *op.cit.*, p. 611.
- (25) H. Hall, *Studies*, pp. 208, 224. *E.H.D.*, Vol. II, p. 800.
- (26) H. Hall, *Studies*, pp. 312-4. *E.H.D.*, Vol. II, p. 800.
- (27) *E.H.D.*, Vol. II, p. 801.
- (28) T.F.T. Plucknett, *op. cit.*, pp. 735-7.
- (29) T.F.T. Plucknett, *op. cit.*, pp. 737ff.
- (30) Sir W. Holdsworth, *op. cit.*, Vol. III, pp. 220-221.
- (31) Sir F. Pollock & F.W. Maitland, *op. cit.*, Vol. II, pp. 80-90, Sir W. Holdsworth, *op. cit.*, Vol. III, pp. 221-226.
- (32) H. Hall, *Studies*, p. 245.
- (33) Sir. F. Pollock & F. W. Maitland, *op. cit.*, Vol. II, pp. 94, 97, 100. Sir W. Worldsworth, *op. cit.*, Vol. III, p. 227.
- (34) Sir W. Holdsworth, *op. cit.*, Vol. pp. 227-231. T.F.T. Plucknett, *op. cit.*, pp. 611-613.
- (35) Sir F. Pollock & F.W. Maitland, *op. cit.*, Vol. II, pp. 90-92. Sir W. Holdsworth, *op. cit.*, Vol. III, pp. 231-233. T.F.T. Plucknett *op. cit.*, p. 313.
- (36) Sir W. Holdsworth, *op. cit.*, Vol. III, pp. 234-5. T. F. T. Plucknett, *op. cit.*, p. 613.
- (37) Sir F. Pollock & F.W. Maitland, *op. cit.*, Vol. II, pp.94-106. Sir Holdsworth, *op. cit.*, Vol. III, pp. 235-246. T.F.T. Plucknet, *op. cit.*, pp. 613-5.

III

上述のように、12世紀中に作製された捺印証書は、その書式の上では未
完成ではあるが、そのためかえって興味深い史実が示されることがある。
以下グロスタア聖ペテロ修道院長の発給した捺印証書の試訳と原文を掲げ
よう。明らかに当修道院内において、またそれぞれの修道院長の在職期間
中に特徴ある、あるいは個性的な書式が形成、展開されるが、本稿におい
ては、第4代修道院長ウィリアム（1113-1139）と第6代修道院長ハアモ

オ（1148—1179）のそれに限定する。1179年以降の捺印証書については稿を改めて論ずることとする。

【証書 1】 G. L. C. IX/7—A. (1113—1139)

グロスタア聖ペテロ修道院長ウィリアム並びに同僧会は、髯のパナルドの息子ウォルタアに、ペンクウムの土地1ハイドを封土権にて、グロスタアの家屋1軒を都市土地保有権にて〔所有するを〕許せり。修道院長ウィリアムの後継者、即ち修道院長ウォルタアは、その代りに、ルッドフォドの土地1ヴァギットを同ウォルタアに与へ、同ウォルタアは、都市土地保有権にて所有せし土地並びに家屋に対する権利を永遠に抛棄せり。かつ彼の父が保有せし土地、かつその〔保有に對し〕修道院長に忠誠を誓へる土地に関し所有せし権利を、四福音書に誓ひて抛棄せり。同修道院長と同僧会は、若し彼が〔修道院のため使者に〕出立せば、1ヶ月に2日〔に限りて〕彼並びにその従士、馬に對する給与〔の支給〕を彼に許せり。かつその土地を直接保有せるか、将又賃貸せるかを問はず、ヘレフォド州内に所有せる土地に對する奉仕として、適宜召集せらるる度毎に、同州法廷にて奉仕せん〔と約せり〕。かつ等しくグロスタア州内に所有せる土地に對し同法廷にて奉仕せんか、或ひは単独にて、或ひは修道院長と共に、或ひは修道僧と共に、年一度ロンドン、ウインチェスタア、ランバァダンに、修道院長の費へにて赴かん〔と約せり〕。本協定の証人は、Walter Constable, その甥 Samson, Reynold de Beckford, Drago Punherius, William Breton, 司祭の Walter, Roger Castle, Wymund, William Ingulf, Porter, その弟Fulk, Roger Callaway, Davidの息Geoffrey, その息Roger, Godfreyの兩名, Osbornの息Richard, 司祭Nicholaus, Grim, Ingulf, William de Barton, Walter Tochi, Harold Reeve, Hadulf Oviet, とその息Sewold, Rogerの兩名, Ernalf Bihird, Sewyn Goldstone, Steinerなり。〔かの譲渡に加へ修道院長G〔ギルバァト〕は、ルッドフォドに12

エイカを加へたり、かつ修道院総会にて是認を得べし。]

C I R O G R A P H V M

【証書 2】 G. C. L. IV/7—A. (1148—1179)

C Y R O G R A P H V M

神の恩寵によりグロスタア聖ペテロ修道院長たる余ハアモウ並びに同僧会は、フェルンの息バernalドに、聖マリア教会に境を接せる道の中央にありて食肉市場に隣接せる石造りの家に当修道院の所有せるふたつの店舗、即ちそのひとつはその南側に、他のひとつはその北側にあるを、年額七志、半額をホックデイに、残りの半額を聖ミカエルが祝日に支払ふこととし、当修道院より封土権にて、かつ相続財産とし保有せしむることを現在より未来にわたりて知らしむべきものなり。げに同バernalドは聖なる福音書に手を置きて、以下の如き誓約をなせり。即ち当教会に忠実ならんことを、かつその保有する間当修道院を疎んじ、或ひは損害を蒙らしむるが如き方途を講じ、思案を廻すまじきこと、かつ受領せし店舗を如何なる緊急の必要ありとて、修道院長と僧会の承認なく何人にも売却し、或ひは交換すまじきことを、かつ他の宗教所並びに宗教人に譲渡すまじきことを、かつ又期に先立ちて、その店舗に修理すべきところ生じなば、バernalドは、己れの費へにてこれを修理すべきこと [を約せり]。将来、訴訟生起せん場合に [あらそひ] 無からしむるがために、印章をもちて証せし割引証書一通を彼に手交し、印章なき割引証書一通を当方に保管し、割引証書の証明により、この協定を確認せり。以下証人として。

【証書 3】 G. C. L. II/21—B. (1148—1179)

M A H P A R G O R I O

神の恩寵によりグロスタア聖ペテロ修道院長たる余ハアモウ並びに同僧

会は、道路中央の石造りの家に当修道院が所有せるふたつの店舗，即ちそのひとつはその南側に，他のひとつはその北側にあるを，トチの息ウイバットに〔下記の条件にて〕保有せしむることを現在より未来にわたりて知らしむべきものなり。即ち十全にかつ遅滞なく貨幣納付をなさん限りは，即ち年八志，内四志をホックデイに，残りの四志を聖ミカエルが祝日に支払ふこととし，当修道院より封土権にて，かつ相続財産とし保有せしめん。かつ同店舗の他に，城に面してありて，当修道院に蹄鉄エアダムの寄進せしニヶ所の土地を，上に定めし期日に，年二十八片支払ふこととし，相続財産とし彼の者に委ねたり。同ウイバットは，当教会に忠実ならんことを，かつ又その保有期間にわたりて，当教会を疎んじ，損害を蒙むらしむるが如き方途を講じ，思案を廻らすまじきことを，前記の店舗或ひは土地を緊急の必要に迫られ他人に売却し，或ひは交換し，他の宗教所或ひは宗教人へ譲渡せざらんことを，誓約せり。かつ期に先立ちて，店舗並びに後に述べし土地に修理すべきところ生じなば，ウイバットは己れの〔費へ〕にて修理すべきこと〔を約せり〕。将来にわたりて〔当協定の〕有効ならんことを希ひて，本状に当教会の印章を押捺し，当修道院に割印証書を保有するものなり。

【証書 4】 G. C. L. IV/3—A. (1148—1179)

C Y R O G R A P H V M

神の恩寵によりグロスタアの修道院長たる余ハアモウ並びに同僧会は，手袋商トマスの保有せし，橋際の当修道院の土地を，ダンニングの息アーノルド，その息ジョンに，〔下記の条件にて〕保有せしむることを現在より未来にわたりて知らしむべきものなり。即ちその生涯に限り年三志〔の納付〕に対し，かつアーノルド並びにその息ジョンの同所の家屋を修理しその必要の生じなば，己れの費へにて建てかふるとの趣にて，当修道院よ

り保有せしむるものなり。かつ兩人は以下の如き誓約をなせり、即ち当修道院に忠実ならんことを、その保有せる期間、当修道院に損害を蒙むらしむるが如き方途を講じ、思案を廻すまじきことを、前記の店舗につきて、それを売却し、交換し、質物に置き、他の宗教所或ひは宗教人に、当修道院の許可なく譲渡すまじきことを、かつ又前記の地代を、その半額をホックデイに、[残りの]半額を聖ミカエルが祝日に忠実に支払ふべきことを、かつ又兩人の死後前記の土地を、すべての追加せられし改良とともに、如何なる請求をもなすことなく、自由にかつ平安に当修道院へ返却すべきこと[を約せり]。兩人が前記の地代を適法に納付せん限り、当修道院はこれを有効かつ揺ぎなきものとすべく、当修道院の印章を押捺せし割印証書の本状を手交し、かつ印章 [の押捺] なき他の一通を当修道院に保有するものなり。

【証書 5】 G. C. L. IV/3—B. (1148—1179)

W A H d V. R O R A O

神の恩寵によりグロスタアの修道院長たる余ハアモウ竝びに同僧会は、セヴァン河にかかりたる橋近くの当修道院の家屋を、ウォルタア・ゴドフォルト竝びにその息ウォルタアに、下記の条件にて保有せしむることを現在より未来にわたりて知らしむべきものなり。即ちその生涯に限り年銀半マルク [の納付] に対し、かつウォルタア竝びに前記のその息の同 [家屋] を修理し、かつ必要の生じなば、己れの費へにて建てかふとの趣にて、

当修道院より保有せしむるものなり。かつ 兩人は以下の如き誓約をなせり。即ち当修道院に忠実ならんことを、その保有せる期間、当修道院に損害を蒙らしむるが如き方途を講じ、思案を廻すまじきことを、前記の家屋につきて、それを売却し、交換し、質物に置き、他の宗教所或ひは宗教人に、当修道院の許可なく譲渡すまじきことを、かつ又前記の地代を、その

半額をホックデイに、[残りの] 半額を 聖ミカエルが祝日に忠実に支払ふべきことを、かつ又両人の死後前記の家屋を、すべて追加せられし改良とともに、如何なる請求をもなすことなく、自由にかつ平安に当修道院へ返却すべきこと [を約せり]。両人が前記の地代を適法に納付せん限り、当修道院はこれを有効にかつ揺ぎなきものとすべく、当修道院の印章を押捺せし割印証書の本状を兩人に手交し、かつ印章 [の押捺] なき他の一通を当修道院に保有するものなり。

【証書 6】 G. C. L. IV/7—A. (1148—1179)

W A H I V R G O R I C

神の恩寵によりグロスタアの修道院長たる余ハアモウ並びに同僧会は、当修道院の修道僧チョフリイ並びにその兄弟アダムの彼等自身[の入会]と共に当修道院に譲渡せし土地、使徒聖トマス教会の傍なる土地の半分を、縮絨エリッチャドに下記の条件にて、封土権にて、かつ相続財産とし保有せしむることを現在より未来にわたりて知らしむべきものなり。即ち年四十片 [の納付] にて、かつ本人とその相続人の同地の家屋を修理し、かつ造作[の必要]生ぜん時に、己れの費へにて建てかへ、かつ又当修道院の許可なく、それらを贈与し、売却し、交換し、他の宗教所或ひは宗教人に譲渡せざらんとの趣にて、当修道院より保有せしむるものなり。かつ当修道院はヨークの大司教に対する四片の都市地代 [の支払ひ] を免除せん。げに前記のリッチャドは以下の如き誓約をなせり。即ち当教会に忠実ならんことを、年地代を即ちホックデイに二十片を、聖ミカエルが祝日に二十片を支払ふべきことを、前記の土地に関して、その保有期間にわたりて当修道院に損害を蒙らしむるが如き方途を講じ、思案を廻すまじきこと [を約せり]。言及せしリッチャド及びその相続人の年地代を誠実に納付せん限り、本協定を有効にかつ揺ぎなきものとすべく、本割印証書の立証をもち

て確認し、かつ当修道院の印章を押捺せる本状を彼に手交し、他の一通を印章〔の押捺〕なく当修道院に保管するものなり。証人として司祭 William White, God〔frey〕 de Horte, Fulcher de Horte, Alfred Conversi, および Richard the White, 助祭 David.

【証書 7】 G. C. L. IV/9—B. (1148—1179)

W A H I V R G O R A O

神の恩寵によりグロスタアの修道院長たる余ハアモウ並びに同僧会は、使徒聖トマス教会の傍なる土地、その半分を〔先に〕縮絨エリッチャドに譲渡せし〔残りの〕半分の土地を、縮絨エゴッドウィンに下記の条件にて、封土権にてかつ相続財産として保有せしむることを現在より未来にわたりて知らむべきものなり。即ち、年四十片〔の納付〕にて、かつ本人とその相続人の同地の家屋を修理し、かつ造作〔の必要〕生ぜん時に、己れの費へにて建てかへ、かつ又当修道院の許可なく、それらを贈与し、売却し、交換し、他の宗教所或ひは宗教人に譲渡せざらんとの趣にて、当修道院より保有せしむるものなり。かつ当修道院はヨークの大司教に対する四片の都市地代〔の支払ひ〕を免除せん。げに前記のゴッドウィンは、以下の如き誓約をなせり。即ち当教会に忠実ならんことを、年地代を即ちホックデイに二十片を、聖ミカエルが祝日に二十片を支払ふべきことを、前記の土地に関して、その保有期間にわたりて当修道院に損害を蒙らしむるが如き方途を講じ、思案を廻すまじきこと〔を約せり〕。言及せしゴッドウィン及びその相続人の年地代を誠実に納付せん限り、本協定を有効にかつ揺ぎなきものとすべく、本割印証書の立証をもちて確認し、かつ当修道院の印章を押捺せる本状を彼に手交し、他の一通を印章上の押捺なく当修道院に保管するものなり。証人として、司祭 William White, Brihtiner の息 Alfred, Tudefeld の息 William の息 Silvester, God〔frey〕 de

Horte, Godwine の婿 Gilbert.

【証書 8—A】 G. C. L. IV/8—B. (1148—1179)

C Y R O G R A P H V M

神の恩寵によりグロスタア聖ペテロ修道院長たる余ハアモウ並びに同僧
 会は、当修道院が城の濠端に所有せるかの土地を、トキの息ウィバートに、
 [下記の条件にて] 保有せしむることを現在より未来にわたりて知らしむ
 べきものなり。即ち三志の年額を、その半額をホックデイに、残りの半
 額を聖ミカエルが祝日に支払ひ、施物役より、封土権にて、かつ相続財産と
 し保有せしめん。げに同ウィバートは、当教会に忠実ならんと、かつ又そ
 の保有期間にわたりて、当教会を疎んじ、脅迫し、悪意を抱き、損害を蒙
 るらしむるが如き方途を講じ、思案すまじきことを誓約せり。本契約を將
 来にわたり揺ぎなきものとせんがために、割印証書の証明により確認し、か
 つ当修道院の印章を押捺せる一通を彼に手交し、印章 [の押捺] なき他の
 一通を当修道院に保管するものなり、かの土地を当修道院の許可なく、他
 人に売却し、交換し、他の宗教所或ひは宗教人に譲渡すまじきことを。

【証書 8—B】 G. C. L. IV/8—A. (1148—1179)

M A H R A P V R G O R I C

前記の [証書 8—A] と同文。

【証書 9】 G. C. L. IV/9—A. (1148—1179)

C Y R O G R A P H V M

神の恩寵によりグロスタア聖ペテロ修道院長たる余ハアモウ並びに同僧
 会は、かつて聖器役ハバートのものなりし家の近くフォルブルックの傍
 なる土地を、かつて当修道院の料理役ゴッドフレイのものなりし家の近く
 聖マリア教会の向ひ側なる他の土地との交換に於て、大エウイリアムに、

都市地代一片と四分の一片にて自由にかつ平安に保有せしむることを現在より未来にわたりて知らしむべきものなり。彼の者より受領せしかの〔土地〕が、しかありし如く、贈与、売却を行うにふさはしく、加へて、前記の土地とともに彼より受領せし家屋〔に加えられし〕改良に対し一マルクを与へたり。ギルバート或ひはベンジャミンの息は、かの土地に所有せしすべての権利にして若しあらばこれを当修道院の〔管轄せる〕郡法廷に於て放棄せん。万一当修道院のため、前記の土地の権原を担保し得ざるが如き事態生ぜんか、彼に引き渡せしかの土地は、当方へ復歸し、加へられし改良は、双方より評価せられん。万一他方に対し改悪生じなば、当方へか、或ひは彼へか、その全額を与ふるものとす。又若し当方が、彼に対し、我らが交換の権原を担保し能はざらんか、同様に彼になすべきものとす。揺ぎなきものとなさんために、割印証書をわかつて、一部を当方に保管し、当修道院の印章を押捺せる他の一通を彼に手交するものなり。証人として、聖三位一体教会の司祭 Richard, Peter de Piriton, Elias de Filton, 助祭の William 並びに Ilbert, Dunning の息 Arnold, Herbert Porter, Maurice 並びに Robert de Barton, Beatirce の息 Richard, William Blancpein その他大勢。

(1974年9月18日)

THE DEEDS OF ST. PETER'S
 ABBEY, GLOUCESTER

I

G(loucester) C(athedral) L(ibrary) IX/7-A. (1113-1139) Original
 Chirograph, parchment; 22.9 cm wide by 15.0 cm deep. No seal, no tag.

Willelmus Abbas totusque Conventus Sancti Petri Gloecestrie
 concesserunt Walterio filio Bernardi cum Barba j hidam terre in
 feudum apud Pencumbam et i domum in burgagio Gloecestrie.
 Successor vero Willelmi/abbatis scilicet Walterius Abbas pro ea dedit
 ipsi Walterio i virgata[m] terre apud Rodefot et ipse Walterius cla-
 /mavit quietam terram et domum quam habebat in burgagio perpe-
 tualiter et abiuravit super iiii^{or} evangilia calum-/niam quam
 habebat in terre quam pater suus tenuerat facitque idem hominum
 abbati. Ipse vero Abbas et Conventus/concesserunt ei corredium
 [suum]ⁱ unoquoque mense duobus diebus si venerit sibi et homini
 suo et equo. Et pro servicio terre quam habet/in Herefortsira serviet
 in eadem sira quotienscumque competenter summonitus fuerit sive
 ad firmam eam/tradat sive in dominium teneat. Similiter pro terra
 quam habet in Gloecestresira faciat serviat videlicet in/eadem sira
 vel solium aut cum abbate aut cum monachis ad corredium abbatis
 perget quoque semel in anno ad Lun-/donia et Wintonia et ad Sanctum
 Paternum. Huius conventionis testes Welterius Conestabilis et Samson
 /nepos eius, Rainaldus de Bech[e]ⁱ fort, Drago Punherius, Willelmus
 Brito, Walterius presbiter, Rogerus Castel,/Wimundus, Willelmus
 et Ingulfus Janitor frater eius, Fulco, Rogerius Caillewei, Gosfridus
 filius Davidi et ii^o filii eius,/Rogerius et Godefridus, Ricardus filius
 Osberni, Nicholaus et Grim et Ingulfus presbiteri, Willelmus de
 Bertona, Walterius Tochi/et Haroldus prepositus, Hadulfus Ovietus
 et i^o filii eius Sewoldus et Rogerius Ernaulfus Bihirde, Sewinus
 filius Golt-/stan, Steinerus [et super hoc domum Abbas G. adauxit
 ei apud Rudeford xii acres terre et hic annuente capitulo.]ⁱ

C Y R O G R A P H V M

[Endorsed] Caps ija de ecclesiasticis tenuris/Walterius cum Barba./Rodefot
 /Pencomba./

II

G.C.L. IV/7-A (1148-1179). Original chirograph, parchment; 14.6 cm

wide by 13.3 cm deep. No seal, no tag.

C Y R O G R A P H V M

Sciant presentes et futuri quod ego Hamelinus Dei gratia Abbas et Conventus Beati Petri/Glocestrie concessimus huic Bernardo filio Ferni duas seldas tenendas de nobis in/feudo et hereditate quas habemus in domo lapidea in medio vico affinicires/ecclesie Sancti Marie que est juxta Macellum unam ex parte australi et alteram ex parte/aquilonis annua pensione septem solidorum persolvendo unam medietatem ad Hokedai et alterum medietatem ad festum Sancti Michaelis. Ipse vero Bernadus tactis Sanctis Ewangeliis sacramentum perstitit/quod fidelis erit ecclesie nostre. Nec quiret artem vel ingenium quo sciat ecclesiam nostram tenura/sua alienari nec aliquo detrimento pati. Nec acceptas seldas aliqui vendet quamque necessitate/vrgente sine permissu abbatis et conventis nec excambiabit, nec ad alium religiosum locum/et personam transferet. Et quod in ipsis seldis priusmodum restat emendandum propriis sumptibus/Bernardus emendabit. Unde ut occasio litigandi in posterum succidatur cirographi testimonio/pactum confirmavimus alteram partem cirographi cum sigilli attestazione illi committentes/et alterum absque sigillo penes nos recinentes. His T.

[Endorsed] Registratur/iij Warda/In domo lapidea affines ecclesie Sancte Marie juxta/Macellum/Contra Bernardum filium Farni/Elinor Ferrator /Tercia Ward/

III

G.C.L. II/21-A. (1148-1179) Original chirograph, parchment ; 34.0 cm wide by 4.7 cm deep. No seal.

M A H E L V R G O R A C O

Sciant presentes et futuri quod ego Hamelinus Dei gratia Abbas et Conventus Sancti Petri Gloec' concessimus Wiberto filio Tochi duas seldas quas habemus in domo lapidea in medio vico una ex parte australi et alterum ex parte/aquilonis tenendas de nobis in feudo et hereditate quandiu debitum censum bene et absque vexatione reddiderit reddendo singulis annis octo solidos quatuor ad Hokedei et alias quatuor ad festum Sancti/Michaelis, et praeter ipsas seldas permisimus ei duas terras hereditarie tenendas qui sunt versus castellum quas Adam Marescallus dedit ecclesiae nostre dando annuatim xx et viij den. solvendos in terminis superius/assignatis.

Ipse uero Wibertus iuravit quod fidelis erit ecclesie nostre, nec quiret artem vel ingenium sciat ecclesiam nostram de tenura sua alienari et in aliquo detrimentum pati nec dictis seldas vel terras alicui vendet/necessitate vrgente nec excambiet nec ad alium religiosum locum vel personam transferet. Et quod priusmodum fuerit emendandum tam in seldis quam in subscriptis terris Wibertus de suo (sic) emendabit. Quod ratum volumus/haberi in posterum et presenti scripto sigillum ecclesiae nostre appovimus et cirographum penes nos retinemus.

[Endorsed] iiii Warda/Registratur/2 seld apud domum Lapidea/in medio vico/Contra Wibertium filium/Tocht/

IV

G.C.L. IV/3-A. (1148-1179) Original chirograph, parchment; 18.8 cm wide by 9.3 cm deep. No seal.

C Y R O G R A P H V M

Sciant presentes et futuri quod ego Hamelinus Dei gratia Abbas et Conventus Gloec' concessimus Ernaldo filio Dunningi et Johanne filio suo/terram nostram iuxta pontem quam Thomas Wantarius tenuit. Tenendam de nobis in vita sua tantum pro tribus solidis per annum tali te-/nore quod idem Ernaldus et Johannes filius eius emendabit domos eiusden terre et reedificabit eas cum necesse fuerit de propriis sumptibus suis. Ipsi autem/juramentum perstiterunt quod fidelis exist-/ent ecclesie nostre nec artem vel ingenium exquirent quo per tenuram suam ecclesie nostra dampnum in-/currat. De predictis seldis nec vendent eas nec excambient nec in vadimonium ponet ad alium religiosum locum vel perso/nam transferent absque nostra permissione et quod prenominatum censum fideliter persolvent medietatem ad Hockdei et medietatem/ad festum Sancti Michaelis. Post decessum autem eorum prefata terra cum omni melioratione apposita restituetur ecclesie nostre/libera et quieta absque alicuius reclamatione. Quod quia ratum volumus et incond-/vulsum permanere quamdiu psipredictum censum le-/gitime reddiderint partem huius cirographi sigillo ecclesie nostre munitam illi tradidimus et altera parte absque sigillo/penes nos retinuimus./

[Endorsed] Quarta Warda./Inter pontem/Joh Ace/Contra Ernaldum/filium Dunninge./

V

G.C.L. IV/3-B. (1148-1179) Original chirograph, parchment ; 20.7 cm wide by 9.8 cm deep. No seal, no tag.

十二世紀
グロスタ
ア市の
土地譲
渡証書

W A H P V R G O R L C

Sciunt presentis et futuri quod ego Hamelinus Dei gratia Abbas et Conventus Gloec' concessimus Waltero Godheorte et Waltero filio suo domum nostram/juxta pontem super Sabrinam tenendam de nobis in vita sua tantum pro dimidia marcha argenti per annum tali tenore quod idem Walterus et pre-/dictus filius suus emendabit eam et reedificabit cum necesse fuerit de propriis sumptibus suis. Ipsi autem juramentum perstiterunt quod fideles existent ecclesie nostre/ nec artem vel ingenium exquirent quo per tenuram suam ecclesia nostra dampnum incurrat, de predicta domo nec vendent eam nec excambient/nec in vadimonium ponent nec transferent ad alium locum religiosum vel personam absque nostra permissione et quod prenominatum censum fideliter/persolvent medietatem ad Hockedei et medietatem ad festum Sancti Michaelis. Post decessu autem eorum prefata domus cum omni meliora-/tione apposita restituetur ecclesie nostra libera et quieta absque alicuius reclamatione. Quod quia ratum volumus et incon vulsum permanere quam-/diu ipsi prefatum censum legitime reddiderint. Partem huius cirographi sigillo ecclesie nostre munitam illis tradidimus et alteram par-/te absque sigillo penes nos retinuimus./

[Endorsed] Terra quod P. le Taylur/iii^{or} Warda/Juxta pontem sub Subrinam/Contra Walterum/Godheorte et filium/eius./

VI

G.C.L. IV/7-B. (1148-1179) Original chirograph, parchment ; 21.2 cm wide by 9.5 cm deep. No seal, no tag.

二
五
一

W A H P V R G O R L C

Sciunt presentes et futuri quod ego Hamelinus Dei gratia Abbas et Conventus Gloec' concessimus Ricardo Fulloni in feudo et hereditate medi/etate terre juxta ecclesiam Sancti Thome Apostoli quam Gaufridus et Adam frater eius Monachi nostri secum nobis dederunt tenendam de nobis pro xl^{ta} d. per/annum tali tenore quod et ipse et heredes sui emendabunt domos eiusdem terre et reedificabunt eas cum opus fuerit de propriis sumptibus suis et quod nec dabunt

nec/vendent nec excambient nec ad alium religiosum locum vel personam transferent eas absque nostra permissione. Nos autem adquietabimus eam de lan-/gabulo iii^{or} d. ad versus Archiepiscopum Eborac'. Prefatus vero Ricardus iuramentum perstitit quod fidelis existet ecclesie nostre et quod annum censum/fideliter persolvat scilicet xx^{ti} d. ad Hockedei et xx^{ti} d. ad festum Sancti Michaelis nec artem vel ingenium exquiret quo per tenuram suam/ecclesia nostra de predicta terra dampnum incurrat. Quam conventionem quia ratam volumus et inconvulsam permanere quamdiu/memoratus Ricardus et heredes sui annum censum bene reddiderint eam sub presentis cirographi attestacione confirmavimus./Cuius partem sigillo ecclesie nostre munitam illi tradidimus et alteram partem absque sigillo penes nos reservamus. Hiis testibus/Willelmo Albo, Sacredote, God' de Horto, Fulcherio de Horto, Aluredo converso et Ricardo Sage, David Diacono.

十二世紀
グロスタ
アの市
の土地
譲渡証
書

[Endorsed] iii^{or} Warda/ut registratur/in Kyngeshome/Contra Ricardum /Fullonem/

VII

G.C.L. IV/9-B. (1148-1179) Original chirograph, parchment ; 20.1 cm wide by 8.8cm deep. No seal, no tag.

W A H P V R G O R L O

Sciunt presentes et futuri quod ego Hamelinus Dei gratia Abbas et Conventus Gloec' concessimus Godwino Fulloni in feudo et hereditate medie-/tate terre iuxta ecclesiam Sancti Thome Apostoli cuius alterum medietatem concessimus Ricardo Fulloni tenendam de nobis pro xl^{ta} d. per/annum, tali tenore quod et ipse et heredes sui emendabunt domus eiusdem terre et reedificabunt eas cum opus fuerit de propriis sumptibus/suis et quod nec dabunt nec vendent nec excambient nec ad alium religiosum locum vel personam transferent eas absque nostra permissione./Nos autem adquietabimus eam de langabulo iii^{or} d. ad versus Archiepiscopum Eboracum. Prefatus vero Godwinus iuramentum prestitit quod fidelis existet ecclesiam nostre et quod annum censum fideliter persolvat scilicet xx^{ta} d. ad Hockedei et xx^{ta} d. ad festum Sancti Michaelis et quod nec artem nec ingenium exquiret quo per tenuram suam ecclesia nostra de predicta terra dampnum incurrat. Quam conventionem quia rata volumus et inconvulsam permanere quamdiu memoratus Godwinus et heredes sui annum censum bene reddiderunt eas sub

一五〇

presentis cirographi attes-/tatione confirmavimus. Cuius partem sigillo ecclesiae nostre munitam illi tradidimus et alterum partem absque sigillo penes nos reservamus./Hiis testibus Willelmo Albo, sacerdote, Aluredo filio Brihtineri, Silvesto filio Willelmi filii Tudefeld, God' de Horte, Gilberto Genere/Godwini./

[Endorsed] i^a Warda/Registratur/Kingsesholme/Contra Godwinum/Fullonem.

VIII-A

G.C.L. IV/8-B. (1148-1179) Original chirograph, parchment; 29.0 cm wide by 5.7 cm deep. No seal. no tag.

C Y R O G R A P H V M

Sciant presentes et futuri quod ego Hamelinus Dei gratia Abbas et Conventus Sancti Petri Gloec' concessimus Wiberto filio Tochi quandam terram quam habemus juxta fossatum castelli te-/nendam de elemosina in feudo et hereditate annua pensione trium solidorum, suorum medietatem persolvat ad Hocchedei et aliam medietatem ad festum Sancti Michaelis./Idem vero Wibertus juravit quod fidelis erit ecclesie nostre nec queret artem vel ingenium quo sciat ecclesiam nostram de tenuria sua alienari vel minui vel malignori detrimentum pati/quod quia volumus ratum haberi inposterum hanc pactionem cyrographi testimonio confirmavimus cuius alteram partem sigillo ecclesie munitam illi tradidimus et alteram partem/absque sigillo penes nos retinemus. Nec illa terra alicui vendet nec excambiet nec ab alium locum vel personam transferet sine nostra permissione.

[Endorsed] Contra Wibertum/Castell'/ut registratur./

VIII-B

G.C.L. IV/8-A. (1148-1179) The counterpart of G.C.L.IV/8-B.Original chirograph, parchment;28.7 cm wide by 6.5 cm deep. No seal, nor tag remains.

M A H I V R G O R I C

Counterpart of no. VIII-A.

[Endorsed] Juxta fossati castelli/Contra Wibertum filii Toki/Non registratur /quia duplex.

IX

G.C.L. IV/9-A. (1148-1179) Original chirograph, parchment ; 18.2 cm wide by 11.9 cm deep (0.8 cm turned up). Seal ; white wax ; oval : 6.5? cm x 4.5cm; sitting figure : legend : illegible; tag, poor impression; imperfect.

C Y R O G R A P H V M

Notum sit omnibus tam presentibus quam futuris quod ego Hamelinus Dei gratia Abbas et Conventus Monasterii Sancti Petri/Gloec' concessimus Willelmo Carpentario terram que est juxta Folebroc vicina domui que quondam fuit Herberti Sacriste/in excambio alterius terre que est ex altera parte ecclesie Beate Marie juxta domum que quondam fuit Godefridi coqui nostri/tenendam libere et quiete pro uno denario et uno quadrante de langabulo et ita propriam ad dandum et vendendum sicut/illa fuit quam suscepimus ab eo et insuper marc illi dedimus pro melioratione domorum quas suscepimus ab illi/cum prefata terra Gillebertus aut filius Benjamin omnes jus suum siquod habuit in eadem terra clamavit/quietum coram nostro hundredo. Et si contingat ali quo casu ut non possit warrantare nobis predictam terram/illa terra quam ei tradidimus ad nos revertetur et afforabitur ex utrumque parte melioratio apposita et siquod demeli-/oratione alteri parti super fuerit aut nobis sicilicet aut illi precium integre reddetur. Et si nos non poterimus wa-/rantare illi excambium nostrum faciemus illi eodem modo. Quod quia ratum esse volumus diviso inter nos cyrographo/unam partem penes nos retiniamus alteram apposito sigillo nostro ille tradidimus. His testibus Ricardo, sacerdote de/Sancte Trinitate, Petro de Pirituna, Helia de Filtuna, Willelmo Diacone et Hileberto Diacone, Hernaldo filio Dunning/Herberto Portario, Maurino Roberto de Bertuna, Ricardo filio Beatricis, Willelmo Blacpein et aliis multis./

[Endorsed] A/Contra Willelmum Carpentarium/de terra juxta Foulbrok./

I would like to acknowledge the kind permission of the Dean and Chapter of Gloucester to make use of their archives and to print texts from their manuscripts. I would also like to thank the Warden and Fellows of All Souls College, Oxford, for granting me the tenure of visiting fellowship of the College during the academic year of 1969—70, thus making this kind of research work possible.

Kaoru Ugawa